

片倉佳史の台湾歴史紀行 第六回

高雄 (6)

—南部横貫公路とルカイ族下三社族群の集落

片倉 佳史 (台湾在住作家)



台湾南部最大の都市である高雄市。日本統治時代に開発が進んだこの街は世界でも指折りの規模を誇る港湾都市である。今回は南部横貫公路と知られざる原住民族・ルカイ族の下三社族群について紹介してみたい。

山岳部を横断する南部横貫公路

3000メートル級の山々が連なる中央山脈。そこを横断する南部横貫公路は素晴らしい景観が続くことで知られている。最高地点は2722メートル。沿線にはスギやヒノキなどの巨木が原始のままの姿で林立しており、高山ならではの絶景が連続する。

中央山脈を越える道路は、北部横貫公路、東西横貫公路、そして南部横貫公路の3つのルートがある。その中で、最も素晴らしい景色が楽しめるのがこの南部横貫公路である。ただし、台南と台東を結ぶ路線バスは廃止されてしまい、公共交通機関による走破はできない。そして、本稿執筆の時点では自然災害によって一部区間が不通となっており、山越えそのものできない。

南部横貫公路の前身となるのは日本統治時代に整備された「警備道路」である。これは原住民族の人々を監視することを目的に設けられ、「理蕃道路」とも呼ばれた。南部横貫公路は終戦まで「関山越（かんざんごえ）警備道路」と呼ばれていた道路に沿って敷設されている。

関山越警備道路の工事は1921（大正10）年に始まっている。完工は1931（昭和6）年だった。そして、全長182・6キロの南部横貫公路が開通したのは1972年10月31日のことだった。

関山越警備道路の西の起点は六龜（ろつき）である。ここから甲仙（こうせん）を經由し、中央山脈を越えた後、台東側に出て、海端（ブヌン語ではハイトトワン）に到っていた。沿線に集落は少なく、しかも、集落を除けばほとんど無人に近いエリアの

間を道路が貫いている。この状況は戦後も変わることなく、南部横貫公路の沿線人口は非常に少ない。



玉山国家公園遊客中心（ビジターセンター）がある梅山口から大関山隧道までの区間には日本統治時代の道路跡が一部だけ残っている。梅山集落の様子。

平埔族の人々が暮らした土地

南部横貫公路の正式名称は省道20号線である。省道としては台南市玉井区を起点とし、甲仙で六龜・美濃（みのう）・高雄方面からの道路と合流。その後、山越えを果たし、台東側に出る。先にも述べたように、現在は梅山～向陽間が不通となっており、本稿執筆の時点では山越えができなくなっている。

玉井は言わずと知れたマンゴーの郷である。旧名は「タバニー」といい、1915（大正4）年に発生した抗日蜂起・タバニー事件で知られている。現在はマンゴーをはじめとする果実の栽培で知られ、1950年代にアメリカ合衆国のフロリダから持ち込まれた苗木を改良したアップルマンゴー（中国語名は「愛文芒果」）の一大生産地となっている。

甲仙はタロイモの産地として知られている。ここ

は平埔族（平地に暮らす原住民族の総称）が文化を残す地域となっており、隣接する南化（なんか）や左鎮（さちん）、そして、山上（やまがみ）では、現在もなお、平埔族に属するシラヤ族の祭典が行なわれ、文化・伝統の継承が熱心に進められている。

シラヤ族は台湾の南部の平野に暮らし、大きな勢力を誇ったが、16世紀頃から漢人系住民との混血が進み、部族としてのアイデンティティを失っていた。日本統治時代が始まった1895（明治28）年頃には漢人文化への同化がかなり進んでいたが、この地域は彼らの文化を知る上で、重要な意味を持っている。

シラヤ族の集落には「公廨（こうかい）」という名の集会所があり、祭事や祈祷、集会はここで行なわれる。台南市の左鎮や南化、山上、そして、高雄市の甲仙などにはこういった公廨が今も残り、調査と研究が進められている。

2009年8月、台風8号は台湾南部に大きな被害をもたらした。台湾ではこれを「八八水災」と呼ぶが、同年8月9日早朝に発生した土石流は高雄市甲仙区小林村を呑み込み、犠牲者は500名におよんだ。この小林村もまた、平埔族の文化が色濃く残る集落として知られていた。



平埔族の中で最大勢力を誇ったシラヤ族。その集会所とも言うべき公廨が今もいくつかの場所に残っている。

ブヌン族が多く暮らす土地

宝来温泉は沿線最大の温泉郷である。温泉街らしきものがあるわけではないが、道路に沿って、い

くつかの温泉ホテルがある。この辺りから先は原住民族の人々が多く暮らしている。

連載第5回で紹介したように、南部横貫公路一帯にはブヌン族の人々が多く暮らしている。高雄市桃源区の一部地域ではサアロア（ラアルワ）族の人々が暮らしているが、人口は少なく、ブヌン族との同化も進んでおり、伝統文化は消滅の危機に晒されている。また、甲仙の北側に位置する那瑪夏（ナマシア）区にはカナカナブ族が暮らしている。

桃源区に入ると、より険しい山道が続く。道路は舗装されており、整備は行き届いていたが、一部区間で「八八水災」の傷跡を目の当たりにする。「地形が変わってしまった」という表現が決して大げさなものでないことを思い知らされる光景が続く。

梅山のあたりでは植生が温帯性のものになっている。ヒノキが見られるのはここよりもさらに高山地域に限定され、南部では珍しいシダ植物の類も多く見られるようになる。ただし、現在、この先は通行止めになっており、その様子を見ることはできない。ここまで来ると全くの無人地帯となっており、人工物が見当たらないという光景が続いている。

南部横貫公路の最高所は大関山隧道の中にある。海拔2722メートル。日本統治時代にはトンネルはなく、警備道路は上方を走っていた。現在も一部ながら痕跡を留めているが、廃道となっており、整備はされていない。

大関山隧道付近には「関山越」という名の由来にもなった関山（標高3668メートル）をはじめ、向陽山（標高3603メートル）や塔関山（標高3222メートル）、関山嶺山（標高3176メートル）、ハイノトナン山（標高3175メートル・現在の名称は海諾南山）、ウハノシン山（標高3115メートル・現在の名称は庫哈諾辛山）、などが点在する。隧道の名称となっている「大関山」とは、現在は「塔関山」という名になっているが、隧道名にのみ、かつての呼称が残っている。

トンネルの手前には「檜木谷」と呼ばれるスポットがある。日本なら天然記念物に指定されそうな巨

木があたりまえのように林立する光景は圧巻だ。この辺りは冬場に寒気団が流れ込むことがあり、北回帰線の南に位置しているながらも、結氷を見ることがある。稀ではあるが、年によっては積雪を見ることがあるという。

なお、南部横貫公路の旅のクライマックスは現在不通となっている大関山隧道を抜けた先にある。一気に視界が開け、前方に見わたすかぎりの雲海が広がっている。息を呑むような絶景で、時間が経つのを忘れてしまいそうな美しさだ。

一刻も早い復旧を祈りたいところである。



宝来温泉。南部横貫公路一带には温泉も多く、泉源は10箇所を超えるが、温泉街らしい施設があるのは宝来温泉だけとなっている。

ブヌン族の人々と台湾総督府

南部横貫公路の沿線に多く暮らすブヌン族の文化については別の回で詳述する予定だが、ここでも簡単に触れておきたい。

ブヌン族は長老を中心とした父系社会を形成し、勇猛果敢なことで知られる。集落の決定事項は長老による合議制で決める。厳格なしきたりを持ち、武勇を尊ぶことでも知られている。

現在の人口は約5万人となっている。南投県を中心に高雄市山岳部、花蓮県、台東県に居住しており、かなりの広範囲である。ブヌン族には5つの氏族というべきグループがある。卓社群(タケ・トド)、卡社群(タケ・バカ)、丹社群(タケ・ヴァタン)、巒社群(タケ・バヌアド)、郡社群(タケ・イスブクン)となり、高雄市の山岳部に暮らしているのは、現在、ブヌン族の最大勢力となっている「郡社」の人々である。

ブヌン族は部族意識が強く、勇猛果敢であったこともあり、領台当初から、新来の統治者である台湾総督府との間で葛藤が繰り返された。抗日事件は各



関山越山岳道路。1924年に発行された台湾総督府の30万分の1の地形図。梅山口～向陽間は現在不通。

地で発生し、台湾総督府はその鎮圧に力を入れていた。特に1914（大正3）年からは武器の押収を強化したが、ブヌン族の勢力範囲は広範で、思うようには進まなかった。対立は長期化し、当時の文献などにはブヌン族が暮らす地域を「台湾で最も物騒な地域」と記すケースもよく見られた。

そんな背景もあり、警備道路はブヌン族の勢力を削ぎ、追い詰めることを目的に設けられたと云っていい。中でも関山越のルートはブヌン族勢力の包囲網の軸となっていた警備道路であった。



南部横貫公路の沿線にはブヌン族の人々が多く暮らす。「米呼米尚」は「ミホミサン」というブヌン族の挨拶の言葉を漢字表記したもの。

ルカイ族の人々

ルカイ族について述べておきたい。彼らは中央山脈の南寄り、その東西に跨って暮らしている部族である。総人口は約1万3168人となっている（2017年4月・原住民族委員会統計）。

ルカイ族は大きく3つの集団に分けられる。まずは中央山脈西側の隘寮渓流域に暮らす「西ルカイ」、濁口渓流域に暮らす「下三社」、そして、中央山脈の東側に位置し、呂家渓流域に暮らす「東ルカイ」である。西ルカイと下三社は海拔500～1000メートル程度の土地に住み、東ルカイは呂家溪が形成した扇状地に住んでいる。

この3つの集団の中で、勢力が最も大きいのは屏東山岳部に暮らす「西ルカイ」であり、通常、ルカイ族と言えばこの人々を示す。また、台東県に暮

らす「東ルカイ」は発祥の伝説に従うと、西ルカイの人々が移住していったものとされる。

「下三社」についてはとりわけ複雑な背景を持っている。まず、下三社の人々が暮らす茂林区は西ルカイや東ルカイの居住地とは接しておらず、やや離れている。さらに、古くは山岳地帯のより奥まった地域に暮らしていたが、移住政策によって、現在の場所に移ってきたという経緯を持つ。そのため、同じルカイ族とは言っても言語や習慣などについてはかなりの相違が見られる。

ルカイ族の特色として、階級社会となっていることが挙げられる。これはパイワン族にも見られるもので、頭目（酋長）と貴族、平民の階級がある。三者は世襲制となっているが、男性については、平民であっても、才能と努力で上の地位を取ることが可能とされる。つまり、身分にかかわらず、戦闘で敵の首を取ることや、大きな獲物を獲得することで、長老による合議を経て、勇士の地位が与えられる。

ルカイ族の集落では、集会所や首棚、水源、墓地などは共有財産とされ、樹木や花、家畜、魚などは



ルカイ族は百歩蛇という毒蛇と深い関わりを持っている。また、髪飾りや服飾品、彫刻などは蝶をモチーフとしたものが少なくない。

貴族の財産とされる。そして、貴族は平民から税を取ること、狩猟や採集を認める。農耕地についても貴族の所有であり、平民は貴族に収穫量の一部、具体的にはイモとアワを納める。

また、ルカイ族は「家」の単位で集団が構成されている。そして、家屋は長男が継承することが基本となっている。

複雑なルカイ族の呼称の変遷

ルカイ族の呼称は日本統治時代、原住民族の分類上、いくつかの変遷を経ている。領台初期、ルカイ族は「ツァリシアン（ツァリセンとも）」※と呼ばれていた。これは彼らが非原住民族、つまり漢人系住民に対し、ツァリシアンを自称していたため、伊能嘉矩が1899（明治32）年に著した『台湾蕃人事情』の中では部族名として用いている。

しかし、その後の研究で、森丑之助や伝承伝説の研究で知られる佐山融吉などは、文化的類似性から彼らをパイワン族に組み込み、ツァリシアンはパイワン族の一支族とした。

昭和時代に入ると、移川子之蔵（うつしかわねのぞう）や言語学者の小川尚義（おがわなおよし）、浅井恵倫（あさいえりん）が言語と系図から判断し、やはり、パイワン族とは別個の部族として、ルカイ族とした。なお、ここには居住地が離れており、文化的には相違点が多いとしながらも、下三社をルカイ族に含んでいる。

さらに後、鹿野忠雄（かのただお）はルカイ族を文化的類似性からパイワン族に再び取り込んでいるが、一方で、人々の自我意識にも着目し、ルカイ亜族は「西ルカイ」、「東ルカイ」、「下三社」に明確に分けられるとしている。

なお、ルカイの自称は「ルカイ」というのが一般的だが、非原住民族に対しての自称は「ツァリシアン」を用いるのが普通だ^{*}。また、東ルカイは自称を「タルマク」という。そして、下三社については三つの集落の名をそのまま自称としている。

※本来の意味は「高地に暮らす人々」。日本統治時代の文献には「ツァリセン」と記されることが多いが、ここでは原語の発音に近い表記を採用している。

パイワン族とルカイ族

ルカイ族は当初、パイワン族に含まれていた時代があった。実際、両者ともに貴族と平民の階級社会であり、習俗・習慣については似ている部分はある。しかしながら、言語的には差異があり、そもそも双方に同族意識はない。縄張り争いなどが発生することも少なくはなかった。

パイワン族との差異を挙げるなら、最も明らかなのは頭目の地位を継承する際、パイワン族は男女の性を問わずに長子が次代頭目となるのに対し、ルカイ族はあくまでも男子がその地位を継承することであろう。つまり、パイワン族には女性頭目の出現があり得るが、ルカイ族の頭目は必ず男性である。

衣装についても、黒を基調とするのは共通しているが、百歩蛇をデザインに取り込むことが多いパイワン族に対し、ルカイ族は壺やユリの花、蝶が多い。

余談ながら、ルカイ族は原住民族の中で最も平均身長が低いとも言われている。これは居住地が隣接しているパイワン族やプユマ族の人々が見知らぬ人をルカイ族であるかどうか、識別する際に用いる判断基準なのだという。まずは相手の身長をみて、次に顔と眼が丸いかどうかを見れば、ルカイ族の人であると判断できるという。筆者もこういった話をパイワン族の集落で何度も耳にしたことがある。



食文化についてはパイワン族とルカイ族には共通点が多く見られるが、やはり細部では異なる点が多いという。

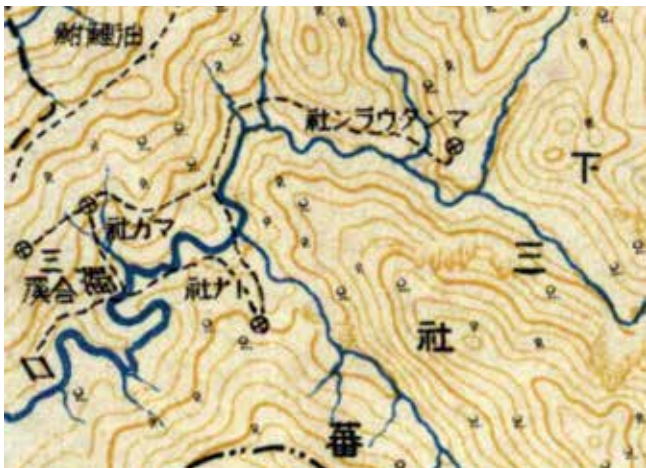
集落によって言語が異なる下三社の人々

高雄市西部の山岳部にある茂林区は人口 2000 人に満たない自治体である。住民の大半を原住民族が占めている。長らく、高雄県茂林郷と呼ばれていたが、2010 年 12 月に高雄県が高雄市に編入され、高雄市茂林区となった。

茂林区にはトルドゥカン（漢字では「茂林」と表記。通称は「マガ」）、オポノホ（同じく「萬山」。通称はマンタウラン）、コガダヴァン（同じく「多納」。通称は「トナ」という 3 つの集落があり、これが「下三社」を形成している。

興味深いのは、3 つの集落はそれぞれ独自の言語を持っていることだ。しかも、どの言葉を見ても、西ルカイ語や東ルカイ語とは違いが見られる。トルドゥカン（茂林）とコガダヴァン（多納）の言葉には近似性が見られるものの、3 つ集落の中間に位置しているオポノホ（萬山）は大きな差異があるという。

異集落間のコミュニケーションが不便ということで、会話には西ルカイ語が用いられる。そして、日本統治時代には日本語が、戦後の中華民国体制下では中国語（台湾式北京語）がコミュニケーション言語となっていたため、言語事情は複雑なものになった。現在、若い世代は中国語を常用し、部族の固有言語は衰退が著しい。一方で、数は少なくなっているが、日本語を常用する高齢者も見られる。



1924 (大正 13) 年発行の 30 万分の 1 地形図。マンタウラン (オポノホ・萬山) がマガやトナよりも山深い位置に記されている。



茂林区にはいくつかの景観スポットがある。龍の頭のような形をした龍頭岩。



蛇の頭に似た蛇頭岩。

下三社の集落を訪ねる

下三社の人々はトナ（多納）を除くと、古くからこの場所に暮らしていたわけではない。為政者によって移住を強いられ、山深い故地から移ってきた人々である。そのため、隣り合わせに見えても、3 つの集落間に歴史的な繋がりがあったわけではない。

茂林区の入口に当たるのがトルドゥカン（茂林）集落である。通称は「マガ」でこちらの方がよく用いられる。「茂林」というのは終戦間もない頃にこの土地を治めた陳茂林という人物にちなんでいる。

なお、この地はルリマダラ（紫斑蝶）が集団越冬することでも知られており、世界的に珍しい自然生態となっている。集団で越冬する蝶は世界でもメキシコのオオカバマダラと当地のルリマダラだけとなっている。これについては連載第 4 回を参照されたい。



マガ（茂林）はルリマダラの集団越冬地として知られている。11月から3月までがシーズンとなる。



山肌に広がるオポノホの集落。茂林区内でもとりわけ人口の少ない集落となっている。

独自の文化を誇る「萬山（オポノホ）」

萬山は現地では「オポノホ」と呼ばれる。漢人からはマンタウランと呼ばれ、この呼称が長らく用いられてきたが、現地では「オポノホ」の名が用いられる。これは集落名のみならず、集団としての自称でもあり、人々には独自の部族意識がある。人口はわずか450名ほどの集団だが、意識の高い人々である。

オポノホの人々がこの場所に移住してきたのは1956年のことだった。中華民国政府の移住政策に従ったものだった。遅れて移住してきたために、トルドゥカン（茂林）ともコガダヴァン（多納）とも言語や習俗は異なる。

ここは山腹を走る道路から下側に集落が広がっている。メインストリートとなる「萬山巷」はとにかく急な坂道で、斜面に沿って横に家屋が並んでいる。その様子は独特で、一見の価値がある。

オポノホの言語は使用人数が少なく、また、生活の現代化や中国語の普及によって、まさに消滅の危機にある。現在は言語の記録と、母語教育が熱心に行なわれている。



茂林区へは本数は少ないものの、旗山から路線バスが出ている。

石板を用いた 伝統家屋が見られる「多納（トナ）」

最も奥まった場所にあるのが多納である。通称は「トナ」。現地では「コガダヴァン」と発音するが、日本統治時代は漢人がこの地を呼ぶ地名に従い、「トナ」と呼ばれた。他地域に暮らすルカイ族も「トナ」と呼ぶことが多い。

ここは移住経験がなく、独自の伝統文化が色濃く残っている。粘板岩質の石材を板状に切りだしたスレート（石板）を用いて造られた伝統家屋をいくつか見ることできる。門柱や壁面に「百歩蛇」が描かれている家屋があれば、それは住人が貴族階級で

あることを示している。また、石板にカタカナが記されていることがあるが、これは表札であり、記されているのは人名である。

また、毎年11月下旬には「タパカラワン（黒米祭）」という祭典が催される。これは収穫を神に感謝し、悪霊を払うというもので、下三社の中でもここだけに見られる祭事である。

なお、かつては濁口溪沿いに温泉が湧き出ており、行楽地となっていた。泉質は弱酸性炭酸泉で、河原に湧き出たこの温泉は野趣満点で、人気を博したが、現在は水害によって立入禁止となっている。



トナ（多納）では表札がカタカナで記されていることもある。



茂林区には3つの集落があり、これ以外はほぼ無人地帯となっている。豊かな自然景観を満喫できる土地でもある。



トナ（多納）の入口にある石碑。下三社の人々は集落ごとに独自の言語を持つ。



トナ（多納）の家並み。スレートを用いた家屋が今も残っている。



トナ（多納）に残るスレート家屋。現在は文化遺産にも指定されている。



夕暮れを迎えたトナ（多納）。青年人口の流出が深刻な社会問題となっている。

ルカイ族の言葉

ルカイ語は発音が複雑で、カタカナで表記することはできないが、参考までに「お元気ですか」という表現は以下のようになる。

マギイームスー（茂林）

サリヴ・オー（萬山）

イッヴイニョニャーソ（多納）

モディギアインギスー（霧台・西ルカイ）

片倉佳史（かたくら よしふみ）

1969年生まれ。早稲田大学教育学部卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。これまでに手がけた台湾のガイドブックはのべ35冊を数える。そのほか、地理・歴史、原住民族の風俗・文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続けるほか、台湾の社会事情や旅行情報などをテーマに講演活動を行なっている。著書に『台湾に生きている日本』（祥伝社）、『古写真が語る 台湾 日本統治時代の50年』（祥伝社）、『旅の指さし会話帳・台湾』（情報センター出版局）、『台湾に残る日本鉄道遺産』（交通新聞社）など。2012年には李登輝元総統の著作『日台の「心と心の絆」～素晴らしき日本人へ』（宝島社）を手がけるほか、台北生活情報誌『悠遊台湾』を毎年刊行。最新刊は『台湾で日帰り旅 鉄道に乗って人気の街へ』（JTBパブリッシング）。『観光コースでない台湾・南部編』（高文研）を近刊予定。

ウェブサイト台湾特捜百貨店 <http://katakura.net/>